『聞き書き集』⑬

令和２年１１月発行

二階堂（にかいどう）　繁則（しげのり）さん

昭和４年（１９２９年）４月６日生　９１歳

「山とともに生きる」
～日鉄鉱山と喜茂別の歴史～

喜茂別町教育委員会

◇「聞き書き」とは、人から聞いた通りに書き取った記録のことです。

◇「聞き手」が「話し手」の方のお宅などにおじゃまして、お話をボイスレコーダーに録音します。

◇寄稿文と録音からできるだけお話しされた内容や口調を生かして、話し言葉で文章にまとめます。

◇それを本人に、確認や修正をしてもらいます。

◇「聞き手」の感想や批評は一切加えていません。
※総合学習質問集並びに梅田氏のレポートにつきましては、一部考察も含まれています。

⇩

◎その人の経験や努力から、生きる知恵を学んだり、自分のこれからの人生に活かしたりすることができるかもしれません。

◎その人の人生を知ることにより、理解が深まり、支え合うことの大切さや、人と交流することの楽しさを伝えてくれるかもしれません。

１　幼少から青年期

私は、昭和４年４月６日に川上で生まれました。今年で 91 歳になりました。生まれた場所は、中山峠に行くところのドライブイン（福島地区周辺）があって、あそこにいたんです。兄弟は４人で、上に兄、下に弟と妹がいて、ぼくは２番目でした。

実家は開拓農家で、祖父（二階堂八百蔵氏）が福島団体（※①）として川上地区に入植し、その後福島地区に下りてきたんだと思うんです。

昭和 12 年に上喜茂別小学校（※②）に入学して、昭和 18 年に卒業しました。

※①　福島団体

東北地方の福島県より明治 44（1911）年４月 27 日に現在の福島、栄、川上地区のあたりに移住した。移住当時の戸数は 89 戸、人口は 157 人である。

移住者のひとりである二階堂八百蔵氏は繁則氏の祖父であり、喜茂別村議会議員を２期（大正 12 年から同 14 年、昭和８年から昭和 12 年）を務めており、分村後の喜茂別の発展に尽力した。

※②　上喜茂別小学校

旧栄小学校。明治 42（1909）年に三宅伊勢松氏の尽力により喜茂別尋常小学校付属上喜茂別特別教授場として開設され、上喜茂別国民学校を経て昭和 22（1947）年に上喜茂別小学校と改称され、昭和 26（1951）年に栄小学校に校名変更した。昭和 60（1985）年３月 31 日をもって閉校となった。

子どもの頃は、友達どうしで家畜のえさになる草を刈ったり

する手伝いを兼ねて遊んでいました。

ある日、熊が寝ていたのに遭遇してね、その当時の熊は人間を追ってきてということはなかったけど、やっぱり熊って恐ろしかったから、ただ逃げるしかなかったね。ただ、近所の後藤さんに迷惑をかけたのさ。その時は熊の姿を見たんではなく、いつもそこにいるから、鈴を持って行って鳴らしたんです。したら熊が驚いて、後藤さんの仕事しているところにとんでいったっていうんです。後藤さんはあわくって逃げ出したそうなんです。ほんと驚くよね。

このころ日本は戦争（日中戦争）をしていましたので、軍からの命令で徴用（援農）のようなものがあり、倶知安からハガキが来て畑の広い農家に対する手伝いや工事の手伝いとして招集がかかっていました。喜茂別町では、クレードルの開業工事の仕事などもありました。

私はまだ10代でしたので、召集令状はなく、いろいろな現場で働いていました。ただ、喜茂別からも戦争に出兵する人がいて、駅に集まって万歳三唱で送り出していました。残念ながら戦死した人（火葬され遺骨となった）を出迎えたのも駅でした。

終戦の年に12月から4月ころまで飛行機の燃料を作るため、トド松の枝から燃料のもとになる油をとるための仕事をしていました。油の採り方は、当時の学生さんがアルバイトで松の枝を集めてきたものをドラム缶に入れて熱を加えて蒸します。出てきた液体を違うドラム缶に入れて抽出するんです。ここで採った油が実際に燃料として使われたのかはわかりません。このころになると燃料が不足していて、樹液までも利用しようとしていたんですね。その仕事に駆り出された学生さんも大変だったろうね。

このころは、いろんな植物から油や成分を抽出して生活に利用していましたね。
この仕事をしている間に終戦を迎えました。

卒業後は、うちの方も生活にゆるくなかったので、学校に行かないで、仕事に出るようにしたんですよね。その年（昭和 19 年）の 12 月 15 日頃だと思うんですが、造材（※③）山で頼まれて、大人の人の中に入って仕事をしたんです。仕事の内容は、宿舎のご飯を炊いたり、自分たちが暖房をとるための薪を運ばされました。そこで仕事して、年明け前に、当番は 12 日くらい仕事をさせられてね、途中で疲れて 2 日間休んだんです。それが「悪い」って言われて、「年明けはもう来なくてもいいから」って言われて、それでうちに帰ったら、おじいさん達に、「恥かきさせられたんだから、うちに帰って来るんでない」って叱られて、その当時、お金もらって行ってるんだから、今の子どもさんだったら、そんなこと言われたら出ていったかもしれないけど、僕たちの時代は家出なんてそんなこといけなかったもんだからね。
それで、年明けに、中山峠に行く途中に昭和鉱山※④（喜茂別鉱山）という鉱山があったんですよね。そこの社宅とか事務所とかの除雪に頼まれて行って、２年くらい冬の間そこに勤めていましたね。夏は農業をやって、それで、そこの鉱山が閉山になってしまって、そこの仕事がなくなって、また、別の造材山に入ってね、最初にやった仕事が、馬が運搬するための道路付け（※⑤）を頼まれました。作業するのは冬ですから雪割りをして、馬そりが通れる道路を作っていたんです。今みたいに重機なんてないからスコップで道路を付けていましたね。
次の年からは、山子（※⑥）さんが足りないんで、やってく

れって頼まれて、それを昭和 26 年までやったんですよね。

※③　造材

　伐採した木を適当な長さに切って木材にすること。この地方では、明治以来、長い間、冬山造材が主流を占めていた。雪上での伐採が、木材の損傷を防ぐこと、農閑期の労働力が容易であること、道路付けが容易で運搬費の節約ができるなどの理由であった。昭和 30 年代になると、夏山造材が一般化した。

雪中木材藪出（やぶだし）
新喜茂別町史より

※④　昭和鉱山

　本鉱山は川上地区にあり、昭和初期に川上地区に居住していた小笠原伝市氏、鈴木作蔵氏、伊藤謙一郎氏が発見し、早瀬忠太郎氏（東京住）とともに硫黄鉱山として採掘に着手した。その後、喜茂別鉱業株式会社（昭和 14 年）、昭和鉱業株式会社（昭和 15 年）と渡り、硫黄鉱山整備の国策により昭和 19 年に休山となった。

※⑤　道路付け

　ここでは、伐採した木材の運搬路を整備することをいう。

※⑥　山子（やまご）

　杣夫（そまふ）ともいう。材木を取る山を意味する杣（そま）において伐採や製材に従事した者を指す。

２　日鉄鉱山に就職

そして昭和 26 年の６月に日鉄鉱山（※⑦）に勤めだしたんです。鉱山に行くことになったのは、自分からです。ちょうど、日鉄鉱山が始まるっていうんで募集があったんです。そして６月に入って、６ヶ月の試用期間が終わって 12 月に採用になりました。それで昭和 26 年から 28 年までは上喜茂別鉱山で、鉱石の積み込みの方にまわされて、２年間そこにいたんですよね。

喜茂別が昭和 28 年の８月まで、それで今度は倶知安鉱山（脇方鉱山、現在の京極町）に転勤になったんですが、脇方には 20 日間位しかいなかったんですよね。それから探査課というところにまわされて、ボーリング（※⑧）をやるようになりました。探査課として最初の出張先は虻田鉱山ですね。

この仕事ではボーリングをつかって地中に鉄鉱石なんかの鉱石があるかどうかの試掘をしていました。はじめて試掘を任されたときは、まだまだ知識なんかもなくて、でも責任はあるもんだから２か月くらい寝る時間をけずって勉強をしたんです。

実際に堀って出てきたものがどんな種類であるかなど先輩からいろいろ教えてもらっていました。特に地質とかにもよって試掘の方法が変わるので苦労しました。

試掘（ボーリング）をする方法を勉強していざ実際にやって、鉱石らしいものがでると、専門で調べている地質屋さんに依頼して調べてもらいます。そこで、鉄鉱石などの鉱石が含まれる地質であることがわかると、実際に採掘がはじまります。

もう少し詳しく言うと、鉱石がある可能性が高い山が見つかると、地中に支柱を埋めて電気を流します。鉱石があるようだということになったら、今度はボーリングが入っていくんですよね。50ｍピッチで碁盤を試掘していって、どこまで入っているか鉱石の端を探して、そこがなくなったら、また別の方へ行

っていました。そして鉱石がある鉱床の端から端までを押さえます。そのあと、表土と呼ばれる鉄鉱石の層の上の土を下請け会社に依頼して取り除いてもらいます。そして、鉄鉱石の層にたどり着いたら、会社で採掘をします。

採掘用の機械を据え付けたら、２～３ヶ月の期間をかけて、幅 200m以上にわたって掘り下げて採掘していきます。

鉄鉱石などは、大体地表から３mから 10mくらい、最大で 30mくらい掘ったところに層があるので、大体 30mくらい掘り進めます。

当時の採掘は、人力でほとんど行っていました。

※⑦　日鉄鉱山

ここでは現在の「日鉄鉱業株式会社」を指す。当時の「日鉄鉱業株式会社」は、昭和 14（1939）年５月 20 日に「日本製鉄株式会社」より分離独立。石炭、鉄鉱石、石灰石などの製鉄用原料の総合開発及び確保を行っていた。

終戦時における日鉄鉱業株式会社の所有する鉱山は、倶知安、上喜茂別、徳舜別、赤沼、虻田、ペーペナイ、仲洞爺、八雲である。

※⑧　ボーリンク

穴を掘って地盤の状況や地層境界の深度などを調べる際に用いられる地盤調査方法の一つ。鉱山においては鉱床の探査のために用いられた。

探査課の仕事は 10 年以上続きました。いろいろな鉱山に出張しては、また虻田に戻って、また、別の鉱山に出張しては、虻田に戻ってということを繰り返していました。虻田の他で試

掘に行ったのは、白老鉱山、これは昭和30年の年の４月に白老鉱山に出張になりました。それから大滝の徳舜別鉱山に９月に入って、10月までそこにいたんですけれど、そこでは硫化鉄鉱（※⑨）が出てきました。鉱石が出たので通常であれば採掘するんですが、当時の日鉄では硫化鉄鉱の鉱業権（※⑩）を持ってないもんだから、鉄鉱石を掘るために採掘して硫化鉄鉱など別の鉱石が出てきてもそれを採ることはできませんでした。ですので、当たった時点で中止してくれって言われて、そこで中止になって、また虻田に戻って、鉱業権をとったあとの翌年の９月頃、また徳舜別鉱山に入って本調査に入ったんですね。３ヶ月置きとか６ヶ月置きでそっちに行ったり、あっちに行ったりしていました。出張したときは虻田なら虻田鉱山、鉱山に宿舎がないときは旅館に泊まってね。大体は鉱山施設のあるところに行ったら、その鉱山の寮に入っていました。徳舜別鉱山に８年間いたんだけれど、本調査したときは大体４年くらいになりますね。

※⑨　硫化鉄鉱

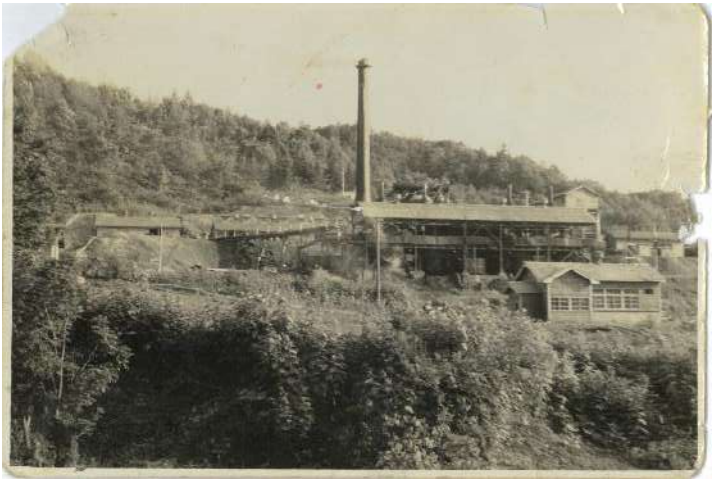
　鉄の硫化鉱物である黄鉄鉱や白鉄鉱、磁流鉄鉱など、硫酸や鉄の原料となる鉱石の総称。

※⑩　鉱業権

　登録を受けた一定の土地の区域（鉱区）において、登録を受けた鉱物及びこれと同種の鉱床中に存する他の鉱物を掘採し、及び取得する権利をいう。

　大滝では鉄鉱石と硫化鉄鋼を両方採掘していました。鉄鉱石は露天掘り（※⑪）、硫化鉄鉱はトンネル掘り（※⑫）で採掘し

ていました。



日鉄鉱山喜茂別工場

トンネル掘りの現在は見に行ってはいないので詳しいことはわかりませんが、坑内が崩落などの危険があることから、出入口はコンクリートで塞いでいるとのことでした。坑道は 200m くらいあったかと思います。

日鉄鉱山採掘場（露天掘り）
新喜茂別町史より

※⑪⑫　露天掘り、トンネル（坑道）掘り

露天掘りとは、鉱石を採掘する手法のひとつであり、坑道を掘らずに地表から渦を巻くように地下めがけて掘っていく手法である。坑道掘りは、山腹に横穴を空けてトンネル状に掘削する方法である。

幸い事故などはありませんでしたが、栄の鉱山に積み込みの作業をしていたときは、鉄鉱石にはヒ素が含まれていましたので、作業をしていた人たちは、重篤な中毒などにはなっていないものの、鼻の粘膜などにはかさぶたができたりしていました。症状が出た人たちは、会社にある診療所に行って処置をしてもらっていました。そのほかの症状としては、皮膚がうるしなどにかぶれたようになってしまうそうです。

その後昭和 26 年に鉄鉱石からヒ素を取り除く施設ができ、ある程度のヒ素は取り除けたようですので、私が作業していた時代には、ヒ素はある程度取り除かれていたようで、私自身は中毒症状などありませんでした。

私のうちに日鉄鉱山に勤めていた時の写真が一枚だけありまして、どなたからいただいたかはわからないのですが、今となっては貴重な思い出の一つになっています。

日鉄鉱業勤務時代

3　家族のために

結婚したのは、昭和 31 年で、そのときは大滝に住んでいました。その頃はまだ探査課で本調査をやっていました。妻は京極町の出身で農家をやめて日鉄に入ったらしいです。きっかけは、妻の兄弟も日鉄で働いていて、お見合をすることになり結婚す

ることになりました。２人の子どもにも恵まれました。

当時は会社が建てた長屋（社宅）がたくさんあって、栄の方には一般の店が２軒くらいありました。それから会社専用の購買もありました。食料品や生活雑貨とか着るものとかなんでも売っていましたね。越冬手当というのが 12 月に出るんですが、それで衣類や食料品を買っていました。その頃には鉄道も開通してましたから、よく伊達の方に遊びに行っていましたね。

結婚写真
※原版はモノクロだったそうですが、カラー修正をした写真を提供いただきました。

その後、昭和 38 年まで大滝にいたんですよね。このころに日鉄の仕事をやめました。理由は、このころ子どもの体調が弱かったもんで、何かあると家内が日赤病院に子ども２人を連れて、診てもらっていました。当時は、日鉄から人を輸送する車ってなかったもんだから、日鉄から駅前まで、こんな子ども２人連

れていくのは大変だったんです。それで妻もかなり疲れ切っていたようでした。それでどうにもならないから退職してくれないかいって言うんで、決意することになったんです。

退職した後は、倶知営林署の鈴川担当区で、夏の間だけ勤めて、冬は菅原造材で働いていました。

営林署（※⑬）では、機械班といって、ブラシカッターで笹刈りして、その後、火を付けて笹を燃やして、そして植林をしました。翌年も採用されることになっていたんですが、行った先行った先で役付き（※⑭）がついて、役付きったら大変なんだよね。それで体悪くしてやめさせてもらいました。営林署には３年勤めました。

※⑬　営林署

農林水産省の外部局である林野庁の地方分局で、国有林を含む山林を造林、伐採、保護など、治山業務を担当する現場部門である。現在は森林管理署に名称が変更されている。

※⑭　役付き

ある役職、特に、人の上に立つ特別な地位・役職につくこと。また、その人。

このころには、今も住んでいる鈴川に引っ越してきました。鈴川は、現在は人口も少なくなって人通りもまばらですが、胆振線が走っていたときは、たくさんの商店がならんで、農産物や家畜、飼料などを乗せた鉄道が行きかっていました。双葉や大滝から倶知安方面に向かうひとたちが乗り降りして、岩内方面から魚の行商に来るおばちゃんたちがガンガンを背負ってき

て鈴川に降りていたので、大変にぎわっていましたね。
昭和 30 年代は、まだまだ車を持っている家庭も少なかったですし、持っていても会社や仕事で使っている人がほとんどでしたので、今みたいに自家用で持っている人はいませんでしたね。ですから、鉄道、駅を利用する人は多かったと思います。鉄道があったといっても喜茂別市街や倶知安などにはめったに行くことはなくて、喜茂別市街以外にも鈴川、双葉などで日用品の買い物などはできるくらいのまちになっていましたね。
鈴川地区の菅原マーケットは交通の不便な地区まで犬ぞりで商品を配達していました。郵便の配達も馬を使って配達していました。
子どもも大勢いて、小学校も中学校もありました。御園方面から鈴川中学校に汽車で通学する生徒もいましたね。
胆振線も昔はおおらかだったから、通学の学生さんがどのくらい乗っていくかわかっていたから遅れている子がいたら少し待ってあげたりもしていたみたいですね。

昭和 41 年４月から御園（金山）にある町の採石場で３年間仕事をしていました。当時は、町で採石をしていて、夏の間の６か月間臨時職員として働いていました。
採掘していた石は安山岩（※⑮）だったかと思います。当時は、道路などの整地・補修に採石を敷きならしていましたので、たくさんの採石を必要としていました。仕事内容は、発破をしていました。
中島さんが建設課長、松井さんは監督をしていました。そこで数年働いていましたがそのなかで、３年目にけがをしてしまいました。
採石場では発破をして穴を掘っているんですが、受け石とい

って発破したときにでる砕石が崩しきれなくて積まれた状態にあるものを手作業で崩して取り除く仕事があります。普段はすべて取り除いて坑内の安全を確保するんですが、たまたま、スイカくらいの大きさの石が、残っていて、たまたまその近くで石割の作業をしていた私のほうに転がってきました。

そして転がった石は運悪く足にぶつかってしまいました。今でも傷跡が残るくらいの傷になってしまいました。発破した石でしたので、割れてとがっていたのかもしれません。

そのときは、痛みはほとんど感じませんでしたが、はいていた靴が大きく裂け、けがをしている私を同僚が見つけて心配していました。

そして、そのとき運悪く破傷風（※⑯）菌に感染してしまいました。破傷風菌は、土の中にあって感染したことで、次第に体調が悪くなっていきました。

破傷風の治療には血清が必要でしたが、当時はなかなか見つからず、そのうち意識がなくなって、体が硬直するなど命が危険な状態にまでなってしまいました。でも、皆さんにあちこち探してもらい、ようやく医大に血清があって急いで搬送されて助かりました。

その後、半年くらい療養していました。

※⑮　安山岩

南米アンデス山中の粗面岩様の火山岩に対して地質学者のブッフが命名したもので日本語訳としてアンデスの名をとり安山岩とした。主な成分は角閃石、輝石、磁鉄鉱で石垣や石壁、砂利などに用いられる。

※⑯　破傷風

破傷風とは、破傷風菌が産生する毒素の扶突である神経毒素により強直性痙攣を引き起こす感染症である。

破傷風菌は、芽胞の形で土中に広く在住し、創傷部から体内に侵入し、感染した部位から破傷風毒素を産生する。

３日から 21 日の潜伏期間を経て、痙笑、開口障害、嚥下障害、呼吸困難、強直性痙攣などを引き起こす。現在は、予防接種または、適切な処置とワクチンの投与により重篤化は回避できるが、注意が必要である。

私が勤務していた３年間で採石場ではけがをする人が続いてしまいました。採石場では火薬を使った発破や高いところでの作業があったので、改めて危険な仕事だと感じました。

体調が回復した後（昭和 45 年）に、当時鈴川にあった戸井建設に就職しました。

その時の仕事は、ケタをかけた橋に型枠をつける仕事をしていました。橋の仕事をしながら、林業の仕事も手伝いに行っていました。

このころは、いろんな仕事をさせてもらいました。

その後、平成元年に藤岡建設工業に８年間勤めました。そこで土木現業所の道路管理の仕事をしていました。道路に穴が開いていたり、交通の妨げになるものを取り除いたりする仕事をしていました。

４　現役を退いて

いろいろ仕事をしてきましたが、60 歳も過ぎたので仕事は引退して現在に至ります。退職してからは仕事らしい仕事はしていませんね。退職した際に妻と話をして、これまでずっと働き

詰めだったんだから少しは遊んでみたらいいんじゃないかと言ってくれまして、のんびりしてきました。

現在 91 歳で、息子も自立して、孫、ひ孫にも恵まれています。自分が今までしてきた仕事なんかの話をする機会ができて、とても緊張しますが、小学生の皆さんに喜茂別の歴史をお話しすることができてとても感謝しています。

現在、きもべつ歴史プロジェクトの皆さんと喜茂別や周辺のまちの鉱山について一緒に研究する中に入れてもらって、齊藤さんはじめ皆さんには感謝しています。

自宅には、当時を知るような資料はないですが、仕事をしてきた思い出の場所ですので、可能な限り思い出して協力していきたいですね。

これまで仕事ばかりで、旅行とかは今までしたことがないですね。仕事をしていないと生活ができなかったというのもありますしね。

これからやってみたいことは特にないですが、今までの経験や自分の住んでいる鈴川の様子を伝えていくこともお話があればしてみたいと思いますね。

ご夫婦そろって

羊蹄山の四季
（写真家の息子さんの撮影した作品で二階堂さんお気に入りの２点を掲載しています）

喜茂別小学校４年生総合学習「喜茂別町の歴史を学ぶ」より

令和２年度の喜茂別小学校総合学習（４年生）において、旧日鉄鉱山、国鉄胆振線（胆振鉄道、胆振縦貫鉄道）について学習しました。見学学習の際に、今回の聞き書き集でお話しをいただいた日鉄鉱業株式会社元社員の二階堂繁則さん、きもべつ歴史プロジェクトの会（齊藤久会長）ほか、ゆかりのある方々にも、特別講師としてご協力していただき、小学生からの様々な質問に答えていただきました。

この聞き書きをきっかけに日鉄鉱山、胆振線ときもべつの歴史の関りについて多くの方々に知っていただけるよう質問と回答について掲載いたします。

※なお、回答については、喜茂別町史等文献、特別講師からの聞き取りにより作成しておりますが、内容に一部不明確な部分がありますことをご了承願います。

日鉄鉱山見学（後列左から３番目が二階堂氏）

〇日鉄鉱山について

Q1　なぜ、日鉄鉱山という名前なのですか？

A1　鉄鉱石が見つかり、採掘しようとした会社の名前が昭和 14 年に作

られた日鉄鉱業株式会社でしたので、日鉄鉱業の鉱山で日鉄鉱山と呼ばれていました。日鉄鉱業株式会社は、現在も続く製鉄会社の中では日本で一番大きな日本製鉄株式会社が作った会社で、製鉄に使う鉄鉱石を掘り集める仕事をする会社でした。本社は東京、札幌にも支社があります。

Q2　どうしてこの山が鉱山だと分かったのですか？

A2　このころは、山の中から金、銀、銅や鉄鉱石、硫黄などを探して大儲けをしようと、あちこち探し回っている人たちがいました。そのような人たちのことを「山師（やまし）」と呼んでいました。日鉄鉱山を最初に発見したのも、そんな「山師」のひとたちだったようです。山師の人たちがどのようにして鉄鉱山を見つけるのか、記録がないのでわかりませんが、鉄分が多い場所の近くの川が赤くなっていたところなどを探したのかもしれません。

鉄鉱山を発見した人は「採掘権（掘る権利）」を得て、それを他の会社などに売ることで生計を立てましたが、転売されたその採掘権を最後に買ったのが、日鉄鉱業株式会社でした。

Q3　ここは、いつからいつまであった鉱山なのですか？

A3　この山に鉄鉱石があることは、明治 37 年に地域の人によって発見されました。その後、昭和 13 年から採掘（鉄鉱石を掘り出す）がはじまり、途中何度か休止もありましたが、昭和 28 年 8 月まで続けられました。

何度か休山になっていますが、理由は、鉄鉱石に含まれていたヒ素を取り除く設備がうまくいかなかったからですが、戦後の昭和 26～28 年にはヒ素を取り除く技術が実用化されました。しかし、その技術はお金がたくさんかかるので会社の利益が出ず、昭和 28 年に幕を閉じました。

Q4　鉱山は、どのくらいの広さがあったのですか？

A4　鉄鉱石が埋まっている場所の広さは、東西約 420 メートル、南北約 120 メートル、深さ約 10～20 メートルです。

これは、喜茂別町プールの約 2,000 個分以上になります。（容積 750,000 ㎥、プール 25m×15m×1m）鉄鉱石がたくさんあるところを「鉱床」と言いますが、日鉄鉱山の「鉱床」は、日鉄線駅からかかなり奥まったところにあって、５つのブロックに分かれていました。

Q5　日鉄鉱山では何を採っていたのですか？

A5　鉄鉱石という、鉄を作るための原料を採っていました。

ちなみに、鉄鉱石から鉄をつくることを製鋼といいます。製鉄は、1,000 度を超える高い温度で鉄鉱石を溶かし、溶けたものから不純物（余分なもの）を取り除いて鉄を作り出します。

鉄鉱石には、赤鉄鉱、磁鉄鉱、褐鉄鉱、砂鉄などがあり、日鉄鉱山にあるのは褐鉄鉱です。ちなみに、現在多く用いられているのは、赤鉄鉱です。それらの鉄は、地球の総重量の約 1/3 に及ぶほど多く存在しているほか、人間の血液にも赤血球の成分（ヘモグロビン）として含まれています。赤血球のヘモグロビンは酸素と結合して酸素を体内に運ぶ役割をしています。そのように、鉄は、酸素の他にもいろんな物質と結合しやすいので、それらの物質を鉄分から切り離すことで初めて「鉄」として様々なものを作る原料になるのです。

日鉄鉱山付近を流れる赤い川
（鉄鉱石に含まれる鉄の成分が流出・酸化し赤くなる）

Q6　何のためにその鉱物を採っていたのですか？

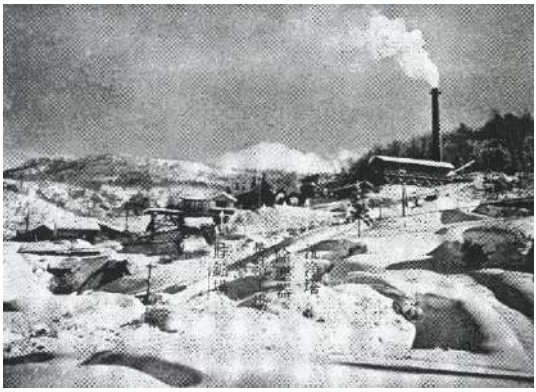
A6　このころの日本は大きな戦争（日中戦争）の最中で、武器や戦車などを作るための大量の鉄を必要としていました。そのため、国（軍）の命令を受けて採っていました。

戦争が終わった後は産業が復興し、様々な工業製品を作るために鉄が一層必要になりました。しかし現在では、日本国内で産出する鉄鉱石は使わずに、オーストラリアやブラジルなどの諸国から 100%輸入しています。

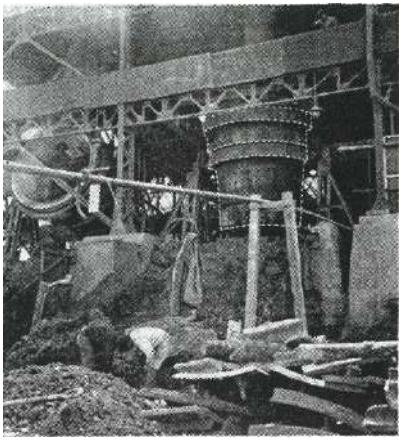
Q7　１年間でどのくらいの量がとれたのですか？

A7　１年間で約８万トン（80,000,000 キロ／10 トンダンプで８千台）の鉄鉱石が採れたといわれています。

昭和 13 年から昭和 17 年ころまでに採れた鉄鉱石は約 30 万トンといわれています。京極町にあった脇方鉱山を経営していた日鉄鉱業株式会社の昭和 13 年の鉄鉱石産出量は約 27 万トンなので、栄地区の日鉄鉱山はその 1/3 くらいという産出量でした。



脱砒工場全景



燃焼ポット

Q8　鉱物はどのように採るのですか？

A8　採掘の方法は、露天掘りという方法で、地面から下に向かって階段

のような溝をつけながら大きな穴を掘るように削っていきます。掘るときは、ブルドーザーや人力で行っていました。

Q9　当時は何人くらいで働いていたのですか？

A9　創業を始めた頃は、174 人の人たちがいました。実際に採掘する人が 158 人、監督や事務作業をするひとが 16 人いたといわれています。多い時には 200 人を超える人たちが働いていました。

Q10　日本人だけが働いていたのですか？

A10　日本人のほかには、当時日本が植民地として支配していた朝鮮（韓国）から、騙したり本人が嫌がっても無理やり連れてきた朝鮮人（当時の韓国や北朝鮮の人々）も 200 人（戦争が終わる約半年前の昭和 20 年 1 月）ほど働かされていました。

Q11　女性も働いていたのですか？

A11　終戦直後の昭和 21 年、日鉄鉱山に住んでいた住民一覧表を見ると、女性の名前が少なくても 20 人見えます。女性の方たちは、採掘ではなく、従業員の食事の世話や、会社の事務などをしていました。

Q12　働く人の住む家もあったのですか？

A12　鉱山の近くに働く人たちの家がありました。家の周りには、商店などもあり、小さなまちのようでした。このほかに、朝鮮人も専用の家がありましたが、環境はあまりよくなかったようです。

Q13　一日の働く時間は何時間くらいですか？

A13　朝８時からお昼の休憩をはさんで午後５時までの８時間でした。現在の会社とあまり変わらない勤務時間でした。

※敗戦後は、労働基準法に基づく労働条件に改善されました。

Q14　働いていた人たちの苦労などわかりますか？

Q14　採掘していると鉄鉱石に含まれている微量のヒ素が鼻などの粘

膜についてしまい、固まってしまうのでそれを取り除くために会社の診療所に通っていた人たちがいました。

子どもたちに当時の様子を丁寧にお話しされていました。（左が二階堂氏）

Q15　どのように採れた鉱物を運ぶのですか？

Q15　採れた鉄鉱石を運びやすいように砕き、採掘現場の近くに作った線路でトロッコなどの荷台に乗せ、ヒ素を取り除くなどの加工施設まで運びます。加工が終わった鉄鉱石は、専用鉄道に積み込むホッパーと呼ばれる施設で貨車に積み込まれ喜茂別駅（今の保育所の場所）から倶知安を通って室蘭の製鉄所（鉄を作り出す工場）まで運びます。

Q16　脱線事故などはなかったのですか？

A16　安全に気を付けて運んでいましたし、たくさんの鉄鉱石を積んでいたのでスピードが出なかったこともあり、脱線事故などはなかったと思います。

Q17　ここから昔の喜茂別駅まで何キロですか、汽車で何分かかったのですか？

A17　喜茂別駅（保育所）から日鉄鉱業上喜茂別鉱山までは、6.6 ㎞あります。車でしたら 10 分ほどで到着しますが、たくさんの鉄鉱石を積んだ蒸気機関車なので、とても時間がかかりました。

　鉄鉱石を運ぶほかには、近隣住民や子どもたちも、移動手段として、学校や買い物など市街地との往復に利用したようです。

Q18　どうして鉱山をやめたのですか？

A18　採掘した鉄鉱石の中には「ヒ素」という毒になるものなどが混ざっていて、これを高い温度で熱して取り除いてから運んでいました。しかしこの作業には多くのお金がかかり利益が出なくってしまいますので、休山（採掘を中止）することになりました。

○胆振線について

喜茂別小学校４年生総合学習より

Q1　なんのために喜茂別から伊達のほうに線路が伸びたのですか？

A1　当時は倶知安や京極、喜茂別で鉄の原料である鉄鉱石などの採掘が盛んにおこなわれていました。採れた鉄鉱石は、鉄にするため室蘭にある工場に運ぶ必要があり、それまでは、小樽・札幌や長万部を経由して運んでいたためとても時間がかかりました。そのため、喜茂別から伊達を通って室蘭に運ぶため胆振縦貫鉄道（昭和 16 年全線開通）が作られました。これによりそれまでの半分の時間で鉄鉱石を運ぶことができるようになりました。

Q2　当時、喜茂別町内には駅は何か所あったのですか？

A2　鉄道が初めてひかれたときには、栄地区の日鉄鉱山から鉄鉱石を運ぶための「上喜茂別駅」と現在のちびっこ広場のあたりに「喜茂別駅」

があり、昭和 16 年の胆振縦貫鉄道の延伸に際し大町シンボルパーク付近に「西喜茂別駅」ができ、喜茂別駅と西喜茂別駅の間は貨物支線となりました。その後、昭和 19 年に国鉄胆振線となった際に喜茂別駅に統合されてから胆振線廃止まで、「留産駅」「喜茂別駅」「北鈴川駅」「御園駅」の 4 つの駅がありました。

ちなみに、鈴川駅に「北」がつくのは、国鉄ほかの路線（東海道本線）にすでに「鈴川」という駅があり、同じ名前の駅をつけることができないことから北にある鈴川で「北鈴川駅」という名称になりました。

Q3　汽車は何時から何時まで走っていたのですか？

A3　胆振線開通当時は京極行、喜茂別行それぞれ 3 本ずつでした。昭和 43 年ころになると、1 日 14 本、下り（伊達から倶知安）朝 6 時台から午後 10 時台まで走っていたようです。ただし、倶知安から伊達をすべて往復していたわけではなく、一部の駅を往復する便もあったようです。

Q4　当時の汽車は一度に何人乗れる汽車（何両）だったのですか？

A4　昭和 3 年 11 月 21 日に開通したときの車両は機関車に客車が 2 両（フロハ 1、フハ 930）、貨物車両 4 両の 6 両編成でした。座席数は、わかりませんが、たくさんの人やものを乗せて走っていました。

Q5　汽車は夜も走っていたのですか？

A5　夜中は走ってはいなかったようですが、朝早くから夜遅くまでの便はあったようです。

Q6　当時は喜茂別駅から一度に何人くらい乗っていたのですか？

A6　開業した年は、11,577 人（11 月 21 日～3 月 31 日）、翌 4 年度は 49,796 人でした。これを一日当たりにすると約 140 名程度の乗車がありました。一番多い年は、昭和 40 年度の 196,108 人で一日あたり 540 人ほどが利用していました。ちなみに、開通式のときに乗車した人数は、

一度に 400 人が乗車したといわれています。

Q7　汽車は人間以外に何か積んでいたのですか？

A7　貨車が２両あり、じゃがいもなどの農産物や、衣料、食料などの生活に必要な物資や木材などを積んでいました。

Q8　列車に動物はのせられたのですか？

A8　列車には、貨車という荷物を載せるための車両があり、家畜などもそこに乗せて運んでいました。

Q9　喜茂別駅の駅員（保線区含む）は何人だったのですか？

A9　喜茂別の駅員は６名でした。その後、機械化が進み人数は少なくなりました。

Q10　当時の汽車（機関車）のスピードはどれぐらいですか？

A10　機関車の性能によって変わります。有名な D51 型蒸気機関車（通称デゴイチ）は最高時速 85km までスピードが出ます。しかし、多くの人や荷物を牽引し、カーブや山道を走るため、安全のため時速約 30km ほどで運行していました。

Q11　汽車の種類は何種類もあったのですか？

A11　開通した当時の車両は、大きく分けて蒸気機関車、客車、貨車の３種類です。それぞれも年代によってさまざまな種類があります。

Q12　機関車は何人で動かしていたのですか？

A12　蒸気機関車を動かすには、機関士（運転士）１名と助士（機関助士）２名の３名です。そのほか、先ほども登場した線路を維持する保線員が 113 名おり、それぞれが役割をもって作業していました。

Q13　汽車を動かすために苦労はあるのですか？

A13　鉄道には、線路の維持管理をする「保線員」がいます。汽車が安全に走れるようにするために、線路の点検や修理、冬場は線路の除雪をし

ていました。また、台風などの風水害によって線路が壊れたり、がけ崩れによって線路が埋まったり、雪の多いときは雪崩れや積雪により大規模な修理や除雪をすることが度々あり、そのたびに危険と隣り合わせで作業をしていました。（聞き書き集 NO. 5 押切壽和氏より）

Q14　昔の喜茂別駅はどんな人が利用していたのですか？

A14　昔は、今のように車がなく、道もきれいではなかったので、いろいろな人やものを運んでいました。例えば、先ほどお話しした鉄鉱石やいろんな荷物のほか、倶知安の高校に通うひとや買い物に行くひとなども利用していました。

Q15　隣の京極駅までの運賃はいくらでしたか？

A15　開通当時の運賃は、喜茂別から京極までの汽車賃は 34 銭で現在の価値で約 160 円くらいです。

Q16　駅はどのくらいの広さだったのですか？

A16　役場横にある旧図書室くらいの広さでした。

Q17　当時の小学生も使っていたのですか？

A17　具体的な利用者数はわかりませんが、交通の要として鉄道があったことから、多くの利用者がいたと思います。この時代は、まだ道路が現在ほど整備されておらず、特に冬には、除雪の行き届いていた線路上を歩いて移動する人が多かったようです。

Q18　当時の喜茂別に駅弁はあったのですか？

A18　駅の中では、様々なものが売られていて、そのなかに駅弁もありました。

Q19　喜茂別大火の際には喜茂別駅はあったのですか？あったとしたら燃えたのですか？

A19　喜茂別の大火は昭和 23 年 5 月 11 日に発生しましたので、喜茂別

駅は、大町シンボルパーク付近にありました。火事は市街地中心部の半分が全焼する大きなものでしたが、駅は火災を免れています。

しかし、劇場や旅館、農協関係の施設などが焼失し、そのなかには鉄道寮もありました。

Q20　喜茂別駅の当時の売り上げは何円ほどだったのですか？

A20　昭和４年度の収入は、37,341 円で現在の価値にすると、2,300 万円くらいになります（1 銭≒6.05 円で計算）。一番多い年は、昭和 37 年の 59,632,212 円で現在の価値にすると２億４千万円くらいになります。

Q21　なぜ、今の「ちびっこ広場」の場所に駅を建てたのですか？

A21　もともとは、現在のちびっこ広場のあたりに駅がありました。しかし、胆振縦貫鉄道（喜茂別から伊達）に延長するため、汽車が通りやすい場所に線路を作ったため、駅の場所を現在のシンボルポイントパークに移しました。

Q22　なぜ喜茂別駅は保育所のあたりから、大町のシンボルパークのほうにうつったのですか？

A22　はじめにできた鉄道は、昭和３年に開通した胆振鉄道で、倶知安から京極そして喜茂別まで開通していました。そのころは、日鉄鉱山からの専用鉄道の駅として今の保育所のあたりに駅がありましたが、その後、伊達市まで線路をつなげるときに、駅の場所を変えることになりました。その理由について、開通当時の駅長さんだった桑原吉与さんは、次のように書いています。(『ヌプリ』２号)

喜茂別駅から大滝・伊達方面に鉄道を伸ばし計画の中では、神社裏山にあった学校の近くを通ることになっていたので、子供たちが学校に通う道が危険に晒されると村役場が反対したことから、鉄道会社もそのルートを諦めて、駅をシンボルパークのところに移して、鉄道が学校のそ

ばを通らないようにしたのです。

鉄道は、戦争が終わりに近づいた昭和 19 年、国鉄になりました。

当時の駅や線路があった場所を歩きながら学習をしました

Q23　どうして鉄道はなくなってしまったのですか？

A23　これまで、いろいろなものや人を運び続けてきた鉄道ですが、鉱山の閉鎖や、人口の減少、道路の整備、車の増加によって、鉄道を利用するひとがすくなくなり、昭和 61 年に廃線となりました。代わりに、バスが走るようになりました。

Q24　汽車（駅）があることで喜茂別にとって良かったことは何ですか？

A24　鉄道がなかった時代には、喜茂別町からほかのまちに行くときは、徒歩か馬車などを利用していました。現在のようにしっかりとした道路がなかったので、移動や輸送には多くの時間と手間がかかっていました。そのため、当時最先端の移動・輸送手段だった鉄道の敷設は、喜茂別の人たちにとっての大きな願いでした。

昭和３年に開通した胆振鉄道は住民が自らお金を出し合い設立した会社で、喜茂別-京極間が開通して以降、ものやひとの行き来がしやすくなり、道路整備や中山峠の開通による自動車社会の普及までの間、ひとびとの大切な「足」として親しまれました。

喜茂別の硫黄鉱山現場遺構を案内していただいた

きもべつ歴史プロジェクトの会（KHP）梅田滋　著

こちらは、きもべつ歴史プロジェクトの会（KHP）梅田滋氏より寄稿していただきました。日鉄鉱山の歴史と今回聞き書きにご協力いただきました二階堂繁則さんの貴重なお話が盛り込まれており、歴史背景を知ることのできる内容となっております。

日鉄鉱山跡を探索した２週間後の５月 24 日（日）、KHP（きもべつ歴史プロジェクトの会）のメンバー６名で、硫黄採掘を目的とした喜茂別鉱山（字川上黒橋地区）の遺構を探索した。

KHP でこの地を訪れるのは、初めてである。２週間前と同様、日鉄鉱山で働いていた二階堂繁則さんが喜茂別鉱山についても現場の記憶がはっきりしているというので、再びガイドをお願いした。

日鉄鉱山と違い、喜茂別鉱山については『新喜茂別町史（H9.3）でも記載が少なく、大雑把な沿革しかわかっていない。しかし、鉱山全体にわたる施設配置や稼働状況についての二階堂さんの記憶は明瞭で、現場の現状とかつての記憶を重ねながら非常にわかりやすい説明をしてくださった。

そして、予想外の証言も飛び出した。

『新喜茂別町史』の記載（P781）をもとに、二階堂さんの説明を補足してみる。

この硫黄産出地は、昭和初期にこの地に住んでいた小笠原伝市・鈴木作蔵・伊藤謙一郎の３名が発見し、これを東京在住の早瀬忠太郎に売り込んだところ、早瀬が昭和 10 年に鉱山権を買い取った。早瀬は早速事

業に着手した（喜茂別鉱山合資会社）が二硫化製錬に失敗し、昭和 14 年に喜茂別鉱業株式会社に売却した。当社も製錬法を確立する前に資金難に陥り、翌 15 年に昭和鉱業株式会社に鉱山権を譲渡、同社は硫黄精錬所などを建設したが、国策により昭和 19 年に休山を余儀なくされた。その後、戦後昭和 24 年に所有権は林勉に移り、硫黄鉱山の歴史を閉じた。

この沿革から、いくつかの特徴を見出すことができる。

ひとつは、他の類例でもそうだが、最初は地元の住民が鉱脈を発見し、しかし自分では事業展開できないので事業に関心を持つ資産家あるいは企業に鉱山権を売却する、という流れが多い。いわゆる「山師」と呼ばれるこの人たちのビジネスモデルであった、と言って良いだろう。

もうひとつは、その時期である。昭和 10 年近くになると、日本は海外に活路を見出そうと軍備増強を進めたことから、地下資源の活用が国策として脚光を浴びていた。地域の状況を熟知する地元の「山師」が国内外の様々な時事情報を入手して、ビジネスを展開することになった時代背景があった。硫黄の場合は、爆薬の原料として軍事産業にとっては必要不可欠だったのである。

さらには、硫黄鉱山の場合、脱硫製錬技術の導入が資金的にも大きなハードルとなっていたことが挙げられる。喜茂別鉱山の場合、このハードルがネックとなって事業化が軌道に乗り切れなかったうちに、戦争による国際関係の激変により軍需産業の状況が急変し、事業として定着できなかった。

二階堂さんがなぜこの喜茂別鉱山についても詳しかったかといえば、彼の勤めていた日鉄鉱業株式会社の事業拡張の狙いと関係があったようである。二階堂さんが勤めた昭和 26 年から 28 年にかけて、日鉄鉱業は、すでに休山となっていた喜茂別鉱山の硫黄を改めて産出し事業化し

ようと考え、試掘などを行ったとのことで、その事業に二階堂さんも関わっていたことから、この場所や関連施設に詳しい知見を得ることになったのである。またそれ以前の、喜茂別鉱山が昭和鉱業株式会社の経営の時に、その近くで家業の農業を手伝っていたことから喜茂別鉱山の状況がある程度把握できていたことも、理解を深める所以であったと話してくれた。

ちなみに、日鉄鉱業株式会社による試掘の結果は事業化の採算性はないとの判断となり、喜茂別鉱山の命運は最終的に見放されて終わったのである。

この日の現場ツアーで、二階堂さんが案内してくれた遺構ポイントは、現場で必要なエネルギーを生み出す水力発電プラントのあった場所、産出した硫黄を室蘭まで運ぶ胆振鉄道に車載するために日鉄鉱山まで運ぶ索道のあった場所、坑内掘りを進める横坑に所々で外気を送り込む立坑跡、採掘に使うダイナマイトの保管庫跡周辺、そして、社宅や事務所や小学校など関連施設が立ち並んでいた事業所の中心地区跡地などであった。

写真（36ページ掲載）は、立坑跡に水が溜まりそのまま沼のような状況になっているポイントである。

立坑跡は、他にもあったとのことだが、笹に覆われた状態で探索すると立坑跡に落下する危険性があるので、この日はこのポイント以外の探索はしなかった。

それぞれのポイントに関して二階堂さんが話してくれた詳細な情報はここには記載しないが、文献史料が『新喜茂別町史』以外に全く入手できない状況にあって、この日の二階堂さんの証言は極めて貴重な情報だった。

ここでは、思いもかけなかった、というより、関心を持ちつつも『新喜茂別町史』には記載がなかったので半ば諦めていた情報が二階堂さんの方からもたらされたことについて触れておきたい。

『新喜茂別町史』によると、昭和 10 年 10 月 10 日時点の喜茂別鉱山合資会社の就労状況は、坑内労働者が男 23 人女 0 人、坑外労働者が男 113 人女 16 人、合わせて 129 人働いていたとの記録がある（第 5 回労働統計実施調査による）。この時点での調査によると、他に、もう 1 箇所の硫黄鉱山である中山鉱山（北海道工業株式会社経営）が計 87 人、となっている。

私は、この記述を目にして、この人たちの出自はどのような実態なのだろうと関心を持ってこの日に臨んだ。二階堂さんに聞いてみようと思ってもいたのである。

二階堂さんは、社宅などがあった場所を案内しながら、「自分が近くに住んでいてそれなりに知っている喜茂別鉱業時代の喜茂別鉱山では朝鮮人も働いていて、その空き地になっている所が彼らの宿舎のあった跡だ」と、指差して教えてくれた。その宿舎の場所は、他の多くの住宅や事務所や関連施設が立ち並んでいた場所から山側に少し離れたところに位置している。

「逃げないように監視されながら働いていたのだろうか」と質問したら、「いや、その頃の朝鮮人は、強制的に連れて来られる時代のちょっと前だったので、彼らは逃げたり逃げないよう監視されたり、ということではなかったようだ」と教えてくれた。

朝鮮からの強制連行が本格化するのは、制度的には、昭和 14（1939）年 7 月 4 日に「昭和十四年度労務動員実施計画綱領」が閣議決定され、その第一次「労務動員計画」に初めて「移住朝鮮人」８万５千人（全体の 7.5%）が組み込まれてからのことである。

このような時代背景の中で、昭和 14（1939）年 11 月末に道内に 1 万人余りの「移住朝鮮人」即ち「強制連行朝鮮人」が入っているので、喜茂別鉱山に昭和 14 年から入っていた朝鮮人は、それ以前から日本に移住していた在日朝鮮人だった可能性が高い。労働条件の悪い鉱山などに就労する以外に良好な労働環境を得ることが難しかった在日朝鮮人が、形の上では自分の意思で働きに来ていたということであったろう。

それ以降に、戦時状況の緊迫化に伴いより多くの人員を石炭や鉄などの産出鉱山に配置するため、不足がちなマンパワーを植民地支配していた朝鮮から拉致同然に強制連行してくることになっていったが、昭和 14 年というのは、ちょうどその分岐点となった年であった。

それなら、在日朝鮮人坑夫の宿舎と日本人坑夫の宿舎などを、離れた場所に分けたのはなぜだろう、という疑問が湧く。

これについては、『北海タイムス』昭和 14 年 9 月 28 日の「半島人をいたはれ／来道を前に道庁当局の親心」と題する記事の中に次のような記述がある。(『北海道における在日朝鮮人史』桑原直人著より)

「・・(中略)・・内鮮人（※注：日本人と朝鮮人）離間の素因となる酷使、虐待等刑事事件の絶無を期し、一方思想関係、公安、風俗関係は所轄署に命じて厳重取り締まる方針である。」

強制連行以前から、在日朝鮮人は治安の対象であり、日本人労働者と融和を図ると言いながら実際には警戒の対象として現場においても監視し続けていた実態が、この記事からも窺える。

言葉では融和を図るとしつつ、強権的な監視や強制は昭和 14 年以降の強制労働時代以前は表面的にはないものの、居住空間も日本人労働者から隔離されしっかり監視、管理されていた実態が、この喜茂別鉱山の朝鮮人宿舎のロケーションからも窺い知ることができる。

喜茂別鉱山の硫黄は、露天掘りと坑内掘りがあったが、坑内掘りの過酷さにとどまらず、水力発電の地下水路の建設などにおいても想像を絶する過酷な労働が余儀なくされたと思われるが、そのような現場に在日朝鮮人労働者が配置されたことは、想像に難くない。各地の報告文書を見ると、そのためにこそ在日朝鮮人や強制連行朝鮮人が導入されていたのである。

このことについては、機会を見て稿を改めたい。

喜茂別鉱山については、謎も多い。

喜茂別鉱山の硫黄産出量の記録は『新喜茂別町史』には載っていないが、町史編纂当時データを入手することができなかったのだろうか。

ズリ山や沈殿池が複数箇所に見受けられた、ということは、実際に産出されていたのか。

二階堂さんは、その産出の可能性を否定した。

「試掘のようなことはされたでしょうけど、硫黄が実際に産出されることはなかったと思います。製錬関係のハードルを超えられなかったからではないでしょうか」

硫黄鉱山としての喜茂別鉱山の史実については、地元喜茂別町民も知らない人が多い。

そもそも歴史の影に隠れがちな鉱山の実態には、日本の植民地支配や侵略戦争の闇が深く関わっていることが多い。

その矛盾の裂け目に見え隠れしているのが、在日朝鮮人や強制連行された朝鮮人の「余儀なくされた強制労働」の実態である。

そして、その裂け目を垣間見てきたのが、地域住民の眼差しである。

それを記録するのが歴史であり、地域史の使命であろう。

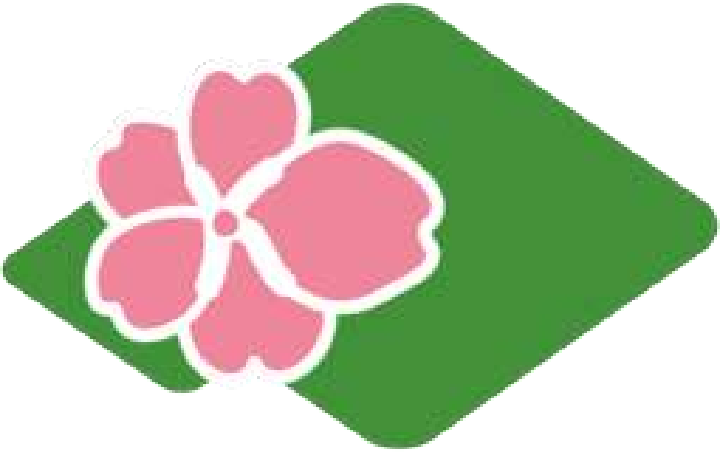
喜茂別鉱山跡に残る立坑跡の沼

あとがき

今回の聞き書き集の作成において、お話をしていただいた二階堂繁則さんをはじめ、多くの方々のご協力のもと喜茂別の貴重な歴史についても掲載することができましたことに心より感謝申し上げます。

〇資料提供・校正

きもべつ歴史プロジェクトの会（KHP　齊藤久会長）の会員の方々

〇喜茂別小学校総合学習特別講師

稲村真禮さん、栄花豊さん、蛯子礼子さん、小原文生さん、齊藤久さん、桜井勝義さん、二階堂繁則さん、林己人さん、吉見啓一さん（五十音順）